

# 广陽学派

北 基行

北京市「紅樓夢」の舞台になった恭王府の花園

## 広陽学派

大興県は北京市に所属する県であるが、清初、ここから一人の大学者が出ている。劉猷廷がその人であり、その当時、黄宗義、顧炎武、王夫子（之）等と等しく名を連ね、革新思想の一派を形成した。

数年まえ『紅樓夢』論争が熱かった頃、民主傾向の新進思潮が、清初の中国封建社会内部にすでに芽生えていたことを証明する為に、多くの方が劉猷廷の言葉を引用していたことを、ご記憶のかたもあるだろう。事實はまさにこの如くで、劉猷廷一派の革新思想は、当時の社会に対して曾て強烈な影響を与えた。

劉猷廷、字は繼莊で、自ら広陽子と号した。劉猷廷の学派が、広陽学派と呼ばれる所以である。彼の著作の大半はすでに遺失して、いまは『広陽雜記』一冊が残るのみである。彼の学派を呼ぶのに、特に広陽を用いるのは、彼を記念する特別の意味があるからである。



恭王府の一宮門

劉猷廷が治めた学域は、黄宗義、顧炎武、王夫子（之）等と比べて広大無辺で、且つ目的性が明確、实用に重点が置かれた。しかし彼の境遇はたいへんみじめなものであった。康熙年間に、彼は数多くの実地調査を行い、多数の重要著作を起草したが、すべて散逸してしまった。後に、乾隆年間

の大学者、全祖望が彼の伝を立て、その中でつぎのように述べた。

“諸公の著述は、皆海内に流布し、而して繼莊の書独り甚だ伝せず、因りて之を求めること二十年にして得べからず。近く始めてその広陽雜記を杭の趙氏に見得たり

……嗚呼、この如き人材にして、而して姓氏は將に狐貉の口に淪ちなんとす、惧へざるべき哉！繼莊の学、主に經世にあり。象

より、緯、律、歴以て辺塞関要、財賦、軍器の属、旁にして歧黃者流に及び、以て積道の言に及び、留心せざる無し、深く彫虫の技を悪む。”

[諸公の著書は、皆国内外に流布残存しているが、繼莊が著した書のみ全く伝わっていない。それでこの二十年捜しもとめつけたが、発見することができなかった。最近、杭州の趙氏が所有する広陽雜記をやっと見つけた。……嗚呼、何という事だ、こんな優れた人材でありながら、姓氏はやがて狐か狸のような似非学者の口に落ち込んで、あたかもそれらがとなえた説となっていくだろう、恐ろしいことだ。繼莊の修めた学問の目的は經世にあった。曆から緯、律、歴史は辺塞の公文、財務、軍器の類で、傍系の色事情まで及び、佛經の言葉などあらゆることに気を留めたが、飾って作文を嫌った。]

全祖望の述べる所によれば、劉猷廷に多くの著作があり、その中で成果の大きい数種類で、例えば、彼の“嘗作新因譜”の如きは、華嚴字母により梵語、ラテン語、蒙古語、満州語に入り、各部の韻母と結合させ、それで“斉しからざる声は万とあれども、此に撰む”に至った。同時に彼は、“四方の土音を譜せんと欲し、以て宇宙の元音の変を窮む。乃ち新韻譜を取るを主とし、而して四方の土音を以て之を填む。”彼はまた方輿の学を研究し、“線表を正確にきざみ、季節の前後、日蝕の分秒、五星の陵犯占驗、皆推すこと可なり。”農地水利についても、彼は独特の見解を有した。禮、学、医薬、数学に於いても同じくすべて研究がある。彼の学問は淵博で、曾て『明史』、『一統志』の編纂事業に招聘された。彼は同僚を次のように評価している。

“諸公の考古余あり、而して未だ实用に切ならず。”これは劉猷廷がいかに实用の学を重視したかを説明するに足る。

当時、史学者の万斯同が有名で、劉猷廷と共に『明史』を編纂した。全祖望によると、“万先生終朝危坐觀書す、或いは瞑目静坐す。繼莊は遊ぶを好み、毎日必ず出で、或る時は旬を兼ねて返らず。帰れば以て其の歴する所を万先生に告ぐ。万先生亦其の読む所の書を以て之を証し、語畢れば復出づ。”

[万先生は毎朝、正坐して読書するか、または沈思黙考された。繼莊といえば、遊ぶのが好きで、毎日出所してくるが必ず外出して帰ってこない。時には十日経っても返(⇒帰)ってこないことがある。返(⇒帰)ってくると見聞したことを必ず万先生に報告した。万先生は、読んでいる本で、その報告内容を照らしあわせ、話が終わるとまたすぐに出かけた。]これより、劉猷廷が現地調査に従事した状況がよくわかる。

当時彼の同僚は、もう一人大興同郷の人、名を王源、字を昆強、号を或庵と呼ぶ人があり、曾て『劉処士墓表』を作った。その中で劉猷廷の少年時代について述べている。

“読書は毎夜臥さず、父母禁じ膏火を与えず、則ち香を燃やして之に代う。因りて一目眇して、又其を折り左肱し、落落として蔽れ衣冠を撰し、風塵の中に蹣跚す。人敢えて之を易(あなど)る無し。蓋し其の心郭然と大公にあり、天下を以て己が任と為す”[毎夜徹夜で本を読んだ。父母はそれを禁じ灯火を与えなかった。彼は、線香に火をつけて代用した。線香の明かり目を細めて字を拾えば、本を伏せ左の脇の下に挟み、破れ衣冠をつけて、とぼとぼと、風塵のなかを漂った。が、敢えて彼を侮る人は居なかった。彼には、天下を治めるといふ己が任務、豁然たる大公があったからである。]その後、“九州を遍歴し、其の山川の形成を覽し、遺佚を訪ね、其の豪傑と交わり、博く軼事を采し、以て益々其の見聞を博め、而して其の学ぶ所を質証す”。

[中国の至る所を遍歴し、各地の地形を眺め、忘れられた遺跡を訪ね、その地の豪傑と交わり、埋もれた歴史を採集し、益々見聞を広め、本で学んだ事柄を現場で実証した。]劉猷廷の勤苦学習と実践検証を以て学問する態度は、ここより非常に明白にみ取れる。

それでは劉猷廷は政治上にいかなる進歩的表現をしたのか、彼の農民一揆に対する態度はどのようであったか、など関心を持つ人より質問があった。我々はここで彼の政治観点を詳述する紙幅が足りないが、王源が述べた次の言葉、“志は天下後世に利濟し、人才を造就するに在り、而して身家は計る所に非ず”[志は天下と後世の人々の便利と有益、且つ人材の育成に在って、個人の利益など一切考えていない]、全祖望が彼について述べた、“蹤跡は尋常の遊子閑歴する所に非ず、故に諱みて人に知らしめざる所在に似たり。”[訪ね歩いた跡は、尋常な遊子の物見遊山の場所ではなく、人に知られたいくない深い理由があるように思えた]を見れば、彼と当時清代の封建統治者は如何に先鋭な対立関係にあったか十分に想像することが出来る。彼の農民一揆にたいする態度に至っては、当然同情的態度を抱いていた。例えば、当時清朝の統治者は張獻忠が人を殺すこと草のごとしと大いに誇張したが、劉猷廷は却って『広陽雜記』の中でこのように書いている。“余聞く、張獻忠衡州に來り、一人たりとも戮せず。以て婁に聖問を問う、則ち果然なり。”[私が聞いたところでは、張獻忠が衡州にやってきたが、一人の人をも殺さなかった、と。そこで自分に親分張獻忠の功績があったかと聞いたら、何と、あったというではないか。]これが当時の農民一揆軍のデマと誹謗一切に対して存在しなかったことを述べているのではないか。

北京の人々、特に大興の人々は、劉猷廷のような歴史人物と彼の学派の存在で鼻高くなる必要はないが、前人の遺産を学習し継承するうえで、もしできるならば、広陽学派の思想内容をさらに一歩研究するため、劉猷廷の遺作を捜査し続けてもよいのではないかと。

【語句解釈】

・嗚呼、如此人才、而姓氏淪于狐貉之口、可不惧哉——ああ、このような立派な人材でありながら、その姓氏がキツネやタヌキの口に淪ちていくのだ、呆然自失の思いだ。姓氏がキツネ・タヌキの口に食われて喉を落ちていくとは、劉猷廷の立派な学説が、キツネ・タヌキの如き似非学者の腹に落ち込みあたかも彼ら自説のごとく其の口から出ていくことを思うと、呆然たる思いである。文献の遺失により劉猷廷の学説を剽窃する輩が出ることはなんと悔しいことだ。

・深惡雕虫之技——小手先の技量（作文の技巧）を深く憎んだ。

・以問婁聖功、則果然也——それで自分に王の政治功績を聞いたところ、果たして想っていた通りであった。「婁」を「婁」（反動派の手下）と読んでもよい。進歩思想が危険視され、“字之獄”事件で多くの犠牲者が出たのは、進歩思想が排満思想に直結していたからである。魯迅はこの問題を雑文で詳しく述べている。

【掲載当時の時代考証と秘められたメッセージ】

「広陽学派」ひとそえ

「紅樓夢」論争に關係して、劉猷廷の言葉が引用された、と書かれています。さて、「紅樓夢」論争とはいかなるものだったのでしょうか。

「紅樓夢」は清朝大貴族の榮華と没落を悲恋物語として描いた中国の長編小説です。原作者は清時代の曹雪芹（そうせつきん）で、乾隆帝時代の1792年に刊行されました。「紅樓夢」論争は、1954年秋に火が付きましました。実証的研究から「紅樓夢」は、曹雪芹の自伝的要素が強いと論証したのが新文学運動の先駆者、胡適でした。その系統を引き継ぐ俞平伯も、原作者の自伝であると主張しました。

これに対して大学を出たばかりの2人の青年が、「封建社会の崩壊を描いたリアリズム文学」と主張し、俞平伯を批判したのです。中央の有力文芸誌は掲載を棚上げにしていたが、毛沢東の支持を得て人民日報に掲載されました。そして、これをきっかけに毛沢東は「紅樓夢研究問題に関する書簡」を出し青年らの主張を支持し、俞平伯東は解放後の知識人の意識変革をめざす大運動を画策し、1966年に起きた文化大革命の伏線のような展開をしました。

鄧拓はこの論争についての思いがあったのではないのでしょうか。劉猷廷は農民一揆に対しては、デマと誹謗はなかったと現地調査から結論しました。そのため清朝の統治者と対立したという記述は、実証主義の重要性を強調しているようにみえます。うがった見方をすれば、胡適、俞平伯の文学作品への考証の態度に賛同しているのではないのでしょうか。「紅樓夢」の時代背景は、清朝の「字之獄」（文字の獄）がありました。排満思想を摘発する思想言論統制は高まっていた。その時代と解放後の知識人統制の類似性を、鄧拓は感じていたのかもかもしれません。これは私の独断ですが、清朝の皇帝を毛沢東になぞらえたのではないのでしょうか。文化大革命で非業の死を遂げた鄧拓の運命を予感させます。

文・斎藤 治

## 広陽学派 原文

北京市所属の大興県、在清代初年有一位著名的学者、当时与黄宗義、顧炎武、王夫之等人齐名、形成了一派革新的思想、他就是劉猷廷。

大家可能还记得、前几年在讨论《紅樓夢》问题的时候、许多文章的作者都曾引用过劉猷廷的一些言论、以证明清代初年在中国封建社会内部、已经出现了一种具有民主倾向的新兴思潮。事实的确是如此。劉猷廷这一派的革新思想、对于当时的社会曾经发生了强烈的影响。

劉猷廷的这个学派、称为广陽学派是比较恰当的。因为劉猷廷字繼莊、自号广陽子、他的著作大半失传、留下的只有《广陽杂记》一种。特别用广陽称他的学派、也含有纪念他的特殊意义。

如果与黄宗義、顧炎武、王夫之等人相比、那末、劉猷廷治学的范围更加宽广、目的性更加明确、更加讲究实用、而他的遭遇却更坏。他在康熙年间调查了许多实际材料、起草了许多重要著作、但是都失传了。后来乾隆年间的大学者全祖望为他立传、其中写道：

“诸公著述、皆流布海内、而繼莊之书独不甚传、因求之几二十年不可得、近始得见其广陽杂记于杭之赵氏。……嗚呼、如此人才、而姓氏将淪于狐貉之口、可不惧哉！繼莊之学、主于經世。自象、纬、律、历以及辺塞関要、財賦、軍器之属、旁而歧黃者流、以及釋道之言、无不留心、深惡雕虫之技。”

据全祖望所述、劉猷廷有许多著作、其中有几种成就最大的、如他“尝作新韵谱”、以华严字母、参入梵语、拉丁语、蒙古语、满洲语、与各部韵母相合、于是“万有不齐之声、摄于此矣”。同时、他“又欲谱四方土音、以穷宇宙元音之变。乃取新韵谱为主、而以四方土音填之”。他还研究方輿之学、“为正经线表、而气节之先后、日蝕之分秒、五星之陵犯占驗、皆可推矣”。对农田水利、他也有独到的见解、对于礼、乐、医药、数学同样都有研究。由于他的学问渊博、曾被聘请参与《明史》、《一统志》的编纂工作。他对于同事们的评价是：“诸公考古有余、而未切实实用。”这就足以说明劉猷廷是多么重视实用之学了。

当时与劉猷廷一起修《明史》的是著名的史学家万斯同。据全祖望说：“万先生終朝危坐觀書、或瞑目静坐；而繼莊好游、每日必出、或兼旬不返。归而以其所历告之万先生。万先生亦以其所读书证之、语毕复出。”由此可见劉猷廷从事实际调查的情形。

当时与他同事的、还有一位他的同乡大興人、名叫王源、字昆強、号或庵、曾作《刘処士墓表》、其中说到劉猷廷少年时、“读书每竟夜不卧、父母禁不与膏火、则燃香代之。因眇一目、又折其左肱、落落摄蔽衣冠、蹣跚风尘中、人无敢易之者。盖其心廓然大公、以天下为己任”。所以、到后来“遍历九州、览其山川形势、访遗佚、交其豪杰、博采軼事、以益广其见闻、而质证其所学”。劉猷廷勤苦学习和以实践验证学问的态度、从这里可以看得非常清楚。

有人特别关心地问道：劉猷廷在政治上有何进步表现？他对于农民起义的态度、又是如何的呢？我们在这里不能详述他的政治观点。但是、只要看王源说他“志在利濟天下后世、造就人才、而身家非所计”、全祖望说他的“踪迹非寻常游士所阅历、故似有所讳而不令人知”、这就不难想见他当时清代的封建统治者是在何等尖锐对立的立场上了。至于他对待农民起义、当然是抱着同情的态度。比如、当时清朝的统治者极力渲染張獻忠杀人如草、劉猷廷在《广陽杂记》中却写道：“余闻張獻忠來衡州、不戮一人。以問婁聖功、則果然也。”这岂不是把当时对农民起义军的一切造谣诬蔑都驳倒了吗？

北京的人们、特别是大興的人们、虽然不必因为刘猷廷这样一个历史人物和他的学派而骄傲、但是、为了学习和继承前人的遗产、如有可能、似乎还可以继续搜求有关劉猷廷的各种遗作、以便就广陽学派的思想内容作进一步的研究。

木下国夫・藤井義則 校正

燕山夜話 第2集4話（通算34話） 广陽学派